伊藤 延由（いとう のぶよし）さん

２０１０年東京のＩＴ企業が福島県飯舘村に設置した農業研修所「いいたてふぁーむ」に管理人兼農民として入植。近隣住民との助け合いが息づく村落コミュニティの中で生活を送っていた矢先、東京電力福島第一原発事故による夥しい放射能汚染のため避難を余儀なくされる。
震災後は飯舘村の山菜や木材などの環境放射能測定を続けている。

飛田 晋秀（ひだ しんしゅう）さん

福島県三春町出身・在住
元々は日本の職人さんの撮影を専門とするプロ･カメラマン。３・１１後「事故を風化させない」「事故後の状況をありのままに知ってほしい」「福島県民の思いを知ってほしい」との思いから、その現状を撮影し続けている。

第８回「いのちの光3･15フクシマ」に向けて
アンテナを磨き、無関心との訣別を！

2020年は、新型コロナウィルスの世界的な拡散のために、一人ひとりの生活が試された１年でもありました。
福島第一原子力発電所の水素爆発事故（2011年３月）から、2021年３月で丸10年となります。
日本カトリック司教団は、2011年の原発事故に対し、日本はおろか地球全体に最悪の環境汚染をしたこと、経済優先策の結果あらゆる生きものの命（いのち）が軽視され、人々を苦しめていることへの厳しいメッセージを発表しました。
「いのちの光3･15フクシマ」は、被災地および全国の信徒･市民の方々とともに、原発事故から見えてきた諸問題と現地報告者の苦悩と解決への糸口を探る役割を担ってきました。
10年という年月は長くもあります。しかし、原発事故の現実から見れば、廃炉までの40年以上もの道のり、環境への放射能汚染からの解放は、100年もかかるであろうと言われていることからすれば、ほんの入り口にいることを認めざるをえません。
何よりも、原発事故で溶けた〈燃料デブリ〉は、取り出し作業すら始まっておりません。放射能を含んだ汚染水は、毎日毎日増えつづいています。生まれ育ったふるさとへ帰りたいと悲願する3万人余の人々の願いは果たせておりません。
10年は区切りであって、終わりではありません。私たちは、原発事故後の、“フクシマ„に立ち向かう時、あらためてそれぞれのアンテナを磨き、頭をあげてきそうな無関心に、きっぱりと訣別していきます。

実行委員一同

☆活動を継続するにあたり、ご支援を募っております。賛同いただければ幸いです。

【賛助金ご支援のお願い】
１．賛助金：一口　１，０００円
２．賛助金の使途：
　事務局運営費（講師謝礼・事務通信費・資料作成費・雑費費等に充当いたします）
３．振 込 先：ゆうちょ銀行
　加入者名：いのちの光の会
　（１）【総合口座】　記号：１８２１０　番号：３８１６３８２１
　（他の金融機関からのお振り込みの場合）
　（２）【店名】　八二八（ハチニハチ）　【店番】８２８
　　【預金種目】　普通預金　【口座番号】３８１６３８２